芸振

大分県芸術文化振興会議会報

No. 21. 22.　49. 2

発行所・大分市府内町　県教育庁文化課内　芸術文化振興会議事務局
発行人・米　田　貞　一　　編集人・矢　野　朔　雄

竹田市の芸術文化施策

佐久間　盛　夫

竹田市は遠く文録3年（1594年）播州三木から、中川氏が移封され、城下まちとしての形態が整い現在に受けつがれています。

かつては豊後の雄藩として、竹田、直入、大野の経済文化の中心地として栄えましたが近時はやゝ停滞を続けております。

然し戦後社会教育の発展と共に、眠れる芸術文化の再興をはかるため、数多くの文化団体が、春の草の芽のように結成され、活動しております。たゆまぬ努力と時間をついやし先祖から受けついだ芸術を守り育てています。

竹田市は古来偉大な芸術家を輩出しています。画聖田能村竹田先生、彫刻家朝倉文夫先生、音楽家瀧廉太郎先生と著名な先輩がおられますし、又文化人を育てる環境は充分あるものと思います。

現在、竹田市文化連盟加入の諸文化団体も十指に余る団体が加入し、それぞれの分野で活躍しています。例年文化の日を中心に、日頃の活動の成果を発表しています。中でも西日本一円を対象とした「画聖田能村竹田先生をしのぶ美術祭」、「瀧廉太郎記念音楽祭」は文化行事としては、これ以上のものは望めないものと思います。然し、おしむらくは最近この行事も伝統と云う名の下に、少々マンネリ化した傾向があります。今後はいかにして脱皮をはかるかが課題になっております。

将来の芸術文化につきましては、埋れる文化財の発掘、保護、文化会館建設により、再生の音楽でなく、生の演奏を聞き、生の舞台を観賞すべく鋭意努力中であります。

竹田市は地形的にも、九州の内陸に位置し道路、交通機関の発達、整備により、大分や熊本への路離は短縮されたとは云え、まだまだ全市民の方々がその恩恵に浴することは不可能であります。多数の市民の方々が気軽に観賞出来る機会、場所を作ることが私の責務だと考えております。

（竹田市長）

第９回大分県芸術

文芸

短歌コンクールと短歌を語る会

大　友　芳　雄

第９回大分県芸術祭共催行事として、大分県歌人クラブは大分合同新聞社と共催で、例年通り10月６日午後１時から朝日生命ビル６階ホールにおいて、短歌コンクールの入選作品の授賞と「短歌を語る会」をひらき、併せて第１回10首競詠入選の３篇に賞金を授与した。

短歌コンクールの応募作品数は去年よりやゝ少なかったが、入選10首、佳作５首（これまでは佳作10首）に授与した。「短歌を語る会」はテーマを職場詠としたが、職場という概念を狭く解するか広く解するかでかなり議論がかわされた。狭く解すれば職場詠とは工場や国鉄の現場などではたらく人の歌となり、広く解すれば家庭ではたらく主婦の歌もふくまれることになるが、一応広義に解して、大分合同新聞社の宮瀬文化部長の司会のもとに約２時間、審査員と参会者から活発な意見がのべられ、有意義な会であった。

10首競詠は歌人クラブの初めての企画であったが、予想外に多くの応募者があった。毎年５月の大分県短歌大会にしろ、この短歌コンクールにしろ、応募は未発表歌１首であるため、初心者でもたまたま秀れた作品を発表して、入選受賞される場合があるが、10首競詠になるとそうはいかず、かなり粒のそろった10首を集めなければならないので、高い作歌力が必要であり、歌人クラブとしてはそういう歌人を見出して、それに賞金を授与しようとねらったものであり、この新しい企画は成功であったと思っている。この企画は来年以降もずっとつづけるつもりである。

別府大学名誉教授
大分県歌人クラブ事務局長

第７回大分県俳句大会

久　保　青　山

第９回大分県芸術祭共催第７回俳句大会は、10月７日午前10時から大分市大分駅前朝日生命ビルで盛大に催された。

この会は年と共に盛大さを加え、本年は350名の多きに達した。

先ず開会行事にはじまり、この俳句会を主催する県俳句連盟物故会員にたいし黙禱を捧げた後、会長代理平田寒月先生の挨拶、来賓の県教育長（代理）・米田芸振会長・大分合同新聞社宮瀬文化部長・後藤犬飼町長の祝辞がありその一語一語は、俳句をたしなむ者としてきわめて有意義であった。

その後出席者は３句投句、３句互選し、平田寒月、篠原樹風、渡辺自流、佐藤峻峰、倉田紘文、安藤大然子、原田翠芳、深見若水、溝口紫浪、菅　直桑、後藤栄生の各選者が、大会賞、佳句賞等をきめた。あと入賞発表・選評・知事賞ほか30数点の大会賞の楯、トロフィー等が贈られた。

作品の内容は、矢張り県内各地から参加の関係上あらゆる方面を取材しており、作品の質も著しく向上し

祭をふりかえって

ている。また今回の特色として、受賞者が各地域に分散され、都市、農村の区別がなくなったことのようだ。

このように俳句大会が盛大となり、作品が普遍的に向上したことは、俳句熱がどことなくひろがったこと、県俳句連盟が拡充されつゝあることもあろうが、別府市に俳誌発行所が一つ誕生したことによるものともいわれているようだ。

そうして来賓祝辞の中にあったが、他の文芸部門が老令化しているのに「俳句」は若い男女が案外多く見られるのは不思議の一つであろうが、喜んでよいのではなかろうか。今後、最も留意せねばならないことは、各地で、俳句熱に燃え、毎月俳句会が催されているが、これによい指導者を得られるようにすることであると思います。

（大分県俳句連盟幹事）

大分県川柳大会

正田青峰

芸術祭もすでに終末に近い11月18日、その共催事業のひとつとして、第5回大分県川柳大会は開催されたのである。

この日は些か冷気が身に沁みたが快晴に恵まれ、9時の開場を待ちかねた県下の川柳家が、各地から参集し、会場の婦人会館3階の和室を90余名の会員で埋め尽した。

大会にはかねて10月初旬発行の機関紙高崎山に、課題8題が下記のように発表されていたのである。

信仰―凡柳選・旅―可染選・画廊―邦郎選・ふるさと―長久選・慕う―思笛選・文士―千明選・肌―ひろみ選・失言―青丘選

当日は各題毎に2句を、1句ずつ句箋紙に浄書し、10時10分までに投句を終る。選者は別室で担当の題から、集った180句の中から40句を選出し、入選句中から特選句1席2席3席を選ぶのである。更に特選句1席の中から、別に設けられた選考委員会で最優秀句を決定する。

この間一般会員は来賓として出席された県教委文化課長矢野朔雄氏の祝辞を頂戴する。つづいて事務局か

らの連絡や報告を聞き、それらに対する活発な意見の開陳が行われた。

選句を完了し11時から披講に入る。

披講というのは、抜けた句（入選句）を選者が読みあげると、その句主（作者）が呼名と言って自己の雅名を呼称する。それを確認して選者はもう1度反復朗読する。と傍に居る補助が句主を呼名し、全員に衆知をはかるのである。三者一体となった入選句発表のリズムが快い雰囲気をかもすのである。

呑童、無双の披講補助（正式には呼名係）で披講が開始され平抜40句・特選1席の句・軸吟（選者の句）が次々と読みあげられ、スムーズに進行して12時半終る。特選1席は次のとおりであった。

数珠をもつ母の心に棲む如来　照春
またもとの私にもどる旅帰り　也寸絵
美術科へ行く娘とふたり佇つ画廊　真砂延
ふるさとも革新票のグラフ伸ぶ　芙二枝
母慕う心を歌に点字打つ　三十路
文士には嫁くなと文士父の愛　加代
木肌にも歴史を刻む御神木　一樹
失言をまるくおさめた名司会　都一郎

披講を終って表彰式に入る。邦郎の開式の辞につづき、凡柳のあいさつ並びに賞状賞品の授与があった。最優秀賞には照春の句が選ばれ大優勝カップが贈られた。また最多数句入選（10句入選）の都一郎に賞状賞品が渡された。式後昼食をかねた懇親会が催され、この間にも会員の希望や意見が述べられ、多大の収穫を得て会を閉じた。来年の再会を期し15時散会したのである。

（大分県番傘川柳連合会同人部長）

第９回大分県芸術

美術

日洋彫工展

菅　　久

ことしの日洋彫工展は近年になく最悪の条件で開かれた。会場が大分文化会館で、しかも11月22日から25日までの４日間。その上木曜日が初日。搬入場所が府内町の町村会館18日（日曜日）、20日（火曜日）は搬入場所から会場の文化会館まで作品を大移動、文化会館にはパネルがないので別府緑ヶ丘高校からトラックで輸送して設営。審査の22日（木曜日）を迎えるまでには例年の何倍もの労働力と費用を使った。開催後のあとかたづけも同様である。そして４日間のため入場者は少なく、収入減であった。

このことについては、第１に美術館がないこと。文化会館であっても申込みの時点で先を見透す配慮がなかったこと。また文化会館にそれ相当のパネルが常置されていないこと。などいろいろな意見や反省が出された。

さて、作品の搬入総数は375点で例年なみ、大きさも号数制限をしていたので最大120号。内容は年々具象作品が多くなってきている。

今回の日洋彫工４部門全体の審査にあたった日展常務理事、芸術院会員の井手宣通氏は賞の選考について、ローカルカラーのあるユニークなものや、素ぼくでも内容のある新鮮なものを推奨された。この点は専門家の間では好評であったが、素人の目には理解しにくい面もあったのではないかという一部の見方もあった。しかし芸術は技術だけではないという考えをズバリ出して審査されたことはここ２、３年つゞいた批評家の審査とちがい作家の目を感じ、心ある人ならば十分納得されたのではないかと思っている。

いずれにせよ第９回県美展、日洋彫工展はそれなりの意義を大きく認めたいと思う。

巡回展は本展終了後、佐伯・日田・高田・宇佐・中津・臼杵・玖珠・杵築をそれぞれ終えて、１月11日大分市へ返還、作者の手もとへかえした。

（県美協事務局次長）

書　道　展

山　口　九　碩

大分県芸術祭参加の県美展は書道がそのトップを切って11月８日から13日まで大分市トキハ文化ホールで開催された。今年度の搬入作品は、漢字、かな、近代詩文書、少字数、てん刻、刻字の５部門で378点（一般公募242、会員87、無鑑査20、役員29）役員作品を除いた349点について東京桑原翠邦氏（書宗院長・東宮御所書道御進講）が審査に当り、入選、入賞作品を選んだ。

この県美展書道展は、本年度で第９回展である。これまで出品作品は條幅作品も認めていたのであるが本展よりこれを認めず作品はすべて枠張りや、額装に制限したため会場の状況も実にすっきりしていた。然し観覧者の一部には従来の條幅作品も床の間等にて観賞するにはふさわしいので残したほうが良いと言った意見も出ていたが本展より制限することに踏切ったのは審査の手数が大助かりであり、また作品の損傷も少ないためであった。

展示は入選作品に、役員、無鑑査を含め265点が展示された。本年度の特徴といえば前にも述べたようにすべて枠装や、額装になったためにすっきりして見易い点と、入選者の半数を女性が占めた点であった。全体にツブがそろっていて特に漢字とかなが充実していた。

審査員桑原翠邦氏の言を借りて言えば漢字の臨書作品が少なく又見劣りしたのは残念だった。それにひきかえ近代詩文書は時代の要求でもあり、花形的存在とも言えるが、あまり作為的になって自然さを失うことは避けるべきかと思う。これからの書道についていえば、日中国交が復活したことにより、書道の交流も緊密化することになる。中国と日本が書を通じて理解を深めるとなると古典が大切になってくる。中国では古典を臨書することが一つの創作と同じ意味を持っている。ところが日本では臨書の意味を認めない傾向がある。中国では大家が古典の臨書をしている。臨書だか

祭をふりかえって

ら創作より価値が低いということは、書道の歴史にはない。日本では日展が臨書を取り上げなかった。今まではそれでもよかったが、将来を考えると、古典の臨書の認識をもう少し深めるべきである。これからの人はこの点をもっと考えてほしい。古典の臨書は日本人にも中国人にも共通の目標となり、理解し合える手段の近道である。その意味で県展に古典の臨書を期待した所以であった。

以下入賞作品は次の諸氏であった。県知事賞松尾如山。県議会議長賞井上一歩。県教育長賞山村春山。大分市長賞平敬義。大分合同新聞社長賞石川桂庵。ＯＢＳ賞野尻玉來。ＴＯＳ賞国松春豊。県美術協会長賞北尾光湖。美術協会賞藤本竹邨、江田春苑、石井春華、川野鳩浦、池末碩舟。書道大賞藤沢節文。準大賞続三葉、藤春泉。　以　上

（県美協事務局次長）

写　真　展

三重野　　元

11月14日二科会会員秋山庄太郎先生を迎えて624点という多くの応募点数の中から、会員の部の推薦10点、奨励賞10点、入選85点、一般の部は推薦10点、奨励賞10点、入選119点の計244点を選んだわけであるが、とくに一般の部の応募人員が大巾に増えた関係もあって、かつて無い激戦となり、県美展の各部門の中で最もきびしいものとなった。

本年の特色はまず第一に写真応募者の底辺が広がってきたことで、600点を越える数はかつて無かったことである。しかし一方ではまだ本当に芸術としての写真に取組む姿勢が甘く、何故落選したかを真剣に考えてみて貰いたいと思う。来年はこれらの人の中から有望な新人の台頭を期待したいものだ。

会員の部、一般の部ともに上位入賞者はその力量が接近し、その順位をつけ難いほどで、中央展に入選組の人達は安定した力を持ってきた。

地域的にみると日田市のレベルアップが目をひく。日常活動の積み重ねの結果であろう。各地域とも見習ってほしいものだ。

11月15日から20日までトキハ文化ホールで公開されたが、写真関係者以外の人達の鑑賞眼もあがってきて批評やアドバイスもあったようで、有難いことであると同時に今日の社会に生きるものとして、社会戯評的写真なども出てきてよいのではなかろうか。

今年はまた大崎聡明氏が二科会々員に推挙され、今後の大分県写壇にとって明るい灯を点じたことを特筆しておきたい。

（県美協事務局次長）

音楽

箏曲演奏会

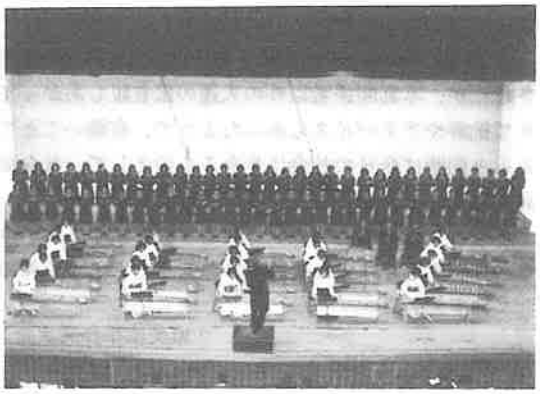
菊　池　幸　園

私達「現代箏曲研究会」も、11月18日多くの方々の温かい応援をいただいて、参加することができました。日ごろから他の分野の、年毎に充実しているのをみるにつけ、邦楽はと考えさせられます。私達は、昨年から出発した研究会ですが、初めて自力で今年の演奏会を持ったわけです。4月から音楽理論及び五線演奏などの勉強を始めて約6ヵ月。まだ「ひよこ」にもなっていない状態で、やっと五線演奏が出来るという程度のまま、熱心なそして厳しい藤井凡大先生のご指導と県立緑丘高校の方々のご支援のもとに、「合唱曲季節のわらべ唄」を終曲として無事演奏を終わることができ

カット専門の店

ビューティー
あいん
都町3丁目　TEL 36−0325
―― カットやパーマでお悩みの方に ――

第９回大分県芸術



ました。演奏会を成功させるという目的に何と多くの方々の善意が寄せられたことか。文化会館でのリハーサルの時、楽器の運搬の時、練習会場がなくて困った時等々、数えあげれば限りない程の他の分野からの応援があったからこそ無事終わることができたと会員一同感激いたしました。まだ練習会場等さまざまな問題がありますが、やっと一歩踏み出したところです。さいわい作曲家・藤井凡大先生からご指導を受けている大分邦楽育成会も来春には一期生が巣立ちますが、まだまだ勉強不足で、箏という楽器での音楽会が身近なものになっていくよう、更に努力をしなければなりません。何よりもまず昔から伝わってきた伝承音楽としての邦楽のすばらしさ、高度の演奏からにじみ出る感動を味わっていただけるよう勉強を続けたいと思います。邦楽も洋楽同様一般の生活の中にとけこんでいくことを願って、今後共真摯な態度と謙虚な気持で一層努力したいと思います。

（現代箏曲研究会会長）

舞踊

日舞「春夏秋冬」

花　柳　有句秀

本年度県芸術祭をふりかえって、大分県日本舞踊連盟といたしましては忘れることの出来ない想い出となりました。始めて芸術祭参加行事として会を催しましたのは昭和44年第5回の芸術祭の時でした。その折は只個人個人の立場で舞台をつとめましたが何時か一丸となって意義ある参加をしたいものと会員一同念願しておりました。幸い本年度は県芸術祭の閉幕行事として参加を指名されましたことは私共の最も光栄とするところでした。1年程前に「春夏秋冬」という題名を選びそのもとで歩を進めましたが大分県日本舞踊連盟といたしましてはひとり連盟だけのものとせず広く県下舞踊界に呼びかけ30名の出演者をもって御祝儀「寿式三番叟」とフィナーレ「みのり」を前後につけどうにか皆様の前にお目見得することが出来ました。現代の日本人がともすれば忘れかけようとしている四季の風物に人々が生きることに忙がしすぎること、あるいは故意に行なわれる自然破壊など理由はいろいろありましょうがそのことを思いますとき何んとも淋しい感じがいたします。日本舞踊の優雅な表現でそれぞれの想いを四季に託して春は夜明けの曙光、夏は降る雨、秋は深山の紅葉、冬は積る雪、それらの中にうたう喜び、悲しみ、怨み、恋い、なりわいなどあからさまの姿を幾分でも表わすことが出来れば幸いと存じまして「春夏秋冬」を選びました。この会が大分県日本舞踊連盟にとりましても将来の発展を占う試金石として各派の共演、諸流派のリーダーによる練習など総て無の中から皆んなで企画構成いたしました。この度はあくまでも古典を主体にした創作で進めましたが又次期に備え新作、創作などに取組みたいと会員一同張り切っております。嬉しいことに今回不出演の各師より次回は是非共参加いたしたい旨続々と申し出がありこれも

大分合同新聞社提供

祭をふりかえって

ひとえに閉幕行事を成功裡に終らせていただいた賜ものと喜んでおります。この盛り上がりをそのまゝに3月には津久見市に於て巡廻公演を計画して毎日練習に励んでおります。日本舞踊は日本人の大切な宝物です。それを守るべき立場の我々は今後色々な課題にぶつかることもあると思われますが良き方向に進めるべく努力する覚悟です。お互いに肩を叩き合いながら終始目的のために一路邁進した結果が大分県日本舞踊界の画期的な飛躍成長を見るに至り御同慶に堪えません。参加行事を無事に終らせていただいた今、関係各方面に対し深く感謝申し上げる次第です。

（県日本舞踊連盟理事長）

バレエ公演

平　瀬　克　美

「桃栗3年、柿8年」のことばを思い、大分県芸術祭も9年目を迎えて、素晴しい実のなった年のような気がいたします。唯単に中央行事だけでなく、地方も芸術文化の必要性を認め、大分県全体が芸術祭にとり組んだような気がいたします。

大分県洋舞踊協会も、「今年は創作物を」と昨年よりとりかゝりましたが、何分準備が出来ず、来年こそはと話し合っています。したがって本年は各研究所の各々の作品を持ち寄った「第12回合同公演」を10月14日に大分文化会館で開催いたしました。

1. 杉原バレエ研究所（竹田市）
   「くるみ割り人形」より
2. 荒武久美子バレエ研究所（佐伯市）
   「眠れる森の美女」より
   「くるみ割り人形」より
3. 笠木啓子バレエ研究所（大分市）
   「白雪姫」
   「マリオネットの行進」
4. 笹本公江バレエ学園（大分市）
   湯原恭子バレエ研究所（別府市）
   「子供の祭典」、「白鳥の湖」より
5. ゆりかご舞踊研究所（大分市）
   「道路が出来た」
6. 佐藤朱音バレエ研究所（大分市）
   「ハンガリヤ舞曲」
   「ロシヤ民族舞踊集より」

以上のプログラムにより、クラッシック、モダン、民族舞踊と各種の踊りが繰りひろげられ盛会裡に終りました。

次に今回は笠木啓子バレエ団結成記念公演として「コッペリヤ」全幕が上演され、芸術祭に花を添え、好評だったことは洋舞踊協会としても大変喜ばしいことだと思っています。

更に佐藤朱音バレエ研究所も芸術祭参加として「エスプリ・ド・バレエ」を公演し洋舞踊協会の芸術祭によせる真剣な意の現われだと思います。

更に地方の文化行事に対しても、日田市のわかあゆ舞踊研究所、別府市の笹本バレエ学園、竹田の杉原バレエ研究所、佐伯市の荒武久美子バレエ研究所がそれぞれ参加し協力しております。

協会員が協力して大分県の芸術文化に貢献しよう、舞踊芸術を極めようと云う熱意に燃えて来年の「朝日長者」の創作に取り組んでいます。よろしく御指導、ご後援をお願い申し上げます。

（県洋舞踊協会会長）

ヤマハピアノ
デェアパソンピアノ
トニカピアノ
エレクトーン
ヤマハNSステレオ

ピアノ調律・修理・運搬
白沢ピアノ店
大分市府内町2丁目6
電話 (32)3930・6331番

第９回大分県芸術

第10回民踊九州大会

永　井　豊　恵

去る10月21日実施の大分県芸術祭参加「第10回民踊九州大会」についてとの事でございますが、一応日本民踊研究会九州支部の概略を説明致したいと思います。日本民踊研究会の本部は、名古屋市千種区上野町３―23に所在し、島田豊年会長以下全国に師範556名を擁し、九州支部は昭和38年２月13名の師範を以って別府市に誕生、大分県民踊界きっての長老、長年のキャリアを持たれる江藤豊南氏を初代支部長に毎月師範会と年６回本部より講師を招き研修を重ね現在83名の師範が県下では宇佐、杵築、武蔵、山香、日出、別府、大分、竹田、玖珠、佐賀関、佐伯、県外では熊本にて、郷土民踊の普及に又社会を明るくする一助のもとに活躍、成果をおさめつゝあります。この間福岡、長崎、宮崎に九州支部から分かれて支部が誕生。昭和39年８月23日に第１回民踊九州大会を別府国際観光会館で開催、以来毎年大会を持ち、２月開催の本部「名古屋民踊まつり」と共に市民に親しまれてまいりました。

第10回記念に県芸術祭参加行事として実施出来ましたのは、会員一同のよろこびとする所であります。

十年一昔と口では簡単に申しますが、振返って見ますと、よくぞ10年間大会毎に一歩、一歩前進そして盛大に続けられて来ましたものと感無量でございます。第10回民踊九州大会では少し華美に流れ民踊の素朴さが次第に消えるのではとの批評を耳に致し、反省させられました。遠い祖先から引き継がれ、悲しい時嬉しい時唄い踊られて来ました民踊なればこそ大衆と共に有るのでなければならないと思います。現代に育つ新しい民踊と共に如何に進むべきか今後の課題として、尚一層の研修に励み民踊を通してわずかながらでも社会のお役に立ちたいと願っております。

来年度は大分文化会館で「第11回民踊九州大会」を８月18日開催の予定です。

（日本民踊研究会九州支部長）

演劇

ぜいげん「沈んだ島の物語」

中　沢　とおる

台本を書きあげるのに一苦労した。フィクションなので自由に書ける気楽さはあったが、瓜生島の伝説は大分の人々の心に長く生きつゞけたロマンに彩られた物語だけに、ロマンをロマンとして描くことと、その社会的、歴史的背景には忠実でありたいと願うことがどのように伝説の話と統一されて戯曲としての構成を支えきれるのかという課題に、最後まで苦しめられた。

初稿は162枚だったが、テキストレダーの結果は130枚になった。書いて演出した約１年間の間に、民話劇が伝説劇になり、伝説が歴史的リアリティの中に埋没した。伝説のロマンを漂よわせたいと願って苦労してくれた上野の森の装置は、遠景の由布、鶴見、高崎の連山が離れすぎた嫌いはあったが、照明とあいまって観客をロマンの世界に訪うに充分であった。

「伝三の家」と、「殖屋敷の大広間」の場は、演出の拙さと重さなってロマンとリアリティの不統一がさらけだされた。おまけに久しぶりの自分の創作であるという気負いが、いろんなテーマを副次的にしゃべらせてしまい、３時間がスッキリと一貫しなかった。そうした拙さをカバーできたのは、素晴しいスタッフの陣容によるあらゆる面からの援助と協力であり、キャストの想像をはるかに超えた熱演であり、１年間、ビクリともしなかった嘘のような見事なアンサンブルであった。その上に前進座が惜しみなく見事な衣裳とか

祭をふりかえって

つらを世話してくだすったことが成功のしめくくりとなった。感謝の言葉もない。

苦労はいろいろあったが、あのカーテンコールの感激で、すべてがむくわれたと関係者全員が語っていた。

キャストはいまでも時折、荷揚小学校体育館（練習会場）に集まりたいという。あの苦労をまたしてみたいというのである。欲をいえば、忙しいとは思うが照明、効果音、装置のリハーサル前の入念な打合せがほしい。ぶっつけであそこまで出来るんだから、順調にやれゝば、もっとスマートに仕上るにちがいない。

（県勤労者演劇協議会会長）

第11回大分県児童文化祭

安長正美

大分県児童文化研究会では、例年11月に県芸術祭参加行事として大分県児童文化祭を開いてきました。「子どもに夢のある楽しい文化財を」と人形劇、童話、ゲーム、歌唱指導を主な内容として今回で11回を数えます。

本年は、大分市に会場がとれなかったことと、今まで大分のみで行なってきたことから初めて杵築市の市民会館で開きました。

11月11日に予定しておりましたが、11日は玖珠町で開かれた「大分県人形劇スェスティバル」と重なるため、11月25日に変更しました。

当日は市内の小学生を中心に、約450名ほどの観客をむかえ、人形劇「カッパむこ、キツネむこ」「すいかどろぼう」、影絵「チュンホワとミミー」（以上大分ともしび）、絵話「切り株物語」（玖珠つくし）、それにゲームで10時から12時までの2時間を楽しくすごしました。

初めての杵築公演には、会場、観客についての不安がありましたが、設備の整った立派な会場を見、ポスターを持って学校を回るうちに先生方の御協力を得、関心の高いことを知り、非常に心強く思いました。

当日は、開場の2時間も前から子どもたちが集まりはじめ、トビラを開く時はケガをする人がいなければいいがと心配するほどの集まりようでした。

開演中は、慣れないせいか話し声が多く、気になる点もありましたが、終始、熱心なまなざしで、杵築市でこの会を開き、本当に成功だったと話し合ったものでした。

最後に、この会を持つにあたり、杵築市教育委員会、同市民会館、そしてわざわざ玖珠からかけつけてくれた「つくし」の方の御協力に紙面を借りて、お礼申し上げます。　（大分県児童文化研究会事務局長）

生活芸術

小笠原流煎茶 大分支部煎茶会

桑原秀礼

今日茶道を修める人々に「茶禅一味」という言葉を知らない人はないであろう。

「茶禅一味」なのは、2つの面からであり、点前や、所作という、形式上からと、もう1つは、内面的精神とも云うべき目に見えない思想の上からであろうと思われる。

茶が「道」であることを正しく知るためにも茶と禅が一味であることを正しく解さねばならない。したがって茶席は道場としての性格をもち、所作はすべて修業というきびしさをもっていなければならないと思う。と、するならば又そこに茶席と所作とを生命づける、掛物とか花、盛物等が重要な意味を持ち更に高い芸術性が要求されるのである。

今年は芸術祭が開幕された第1日曜日、10月7日を小笠原流煎茶の大分支部茶会と決めた。大分支部では、上手な人だけがお点前をするということでなく、先輩も後輩も全員がそれぞれの持場で、心をこめてお客様をおもてなしすれば、券の印刷から看板書き、テント張りに至るまですべて会員の力で誠をもってこれにあたるということです。市の生活文化展と並んで城址公園に設けられた造園の数々と、その見事な日本庭園のたゝずまいの奥に受付をおき、やぐら内の茶室ではこの日10時より一般の方々をお迎えした。2階の香煎席にはいかにも文人茶にふさわしく、老松、白玉椿、丁字いも、蘭の盛物が飾られ桜湯でのどをうるおされたお客様を次々と本席へ案内し、そこでは瓢杓点前に

第９回大分県芸術

よる甘い玉露を楽しんで頂いた。中国文化の香りを伝える文房飾りや、由緒ある盛物は特に興趣深いものがあり、今年は年令的にも巾広く、小学生から男性の方々まで、多数の来席を得ましたことは非常に意義深いものがありました。

日常に直結した煎茶、生活の中の茶道は、現代のようにあらゆるものが機械化された中にあって、本来の人間の持味を楽しむことが出来るものだと思う。そして年毎に大衆に親しまれてゆく煎茶を通じて、めまぐるしい今日、ともすれば忘れられがちな心のゆとり、心の和、がそこから生まれ、あすへの活動力の源となることが現代社会に於ける茶道のもつ大きな役割であり、又私共に課せられた「道」なのではないだろうか。

（小笠原流煎茶大分支部長）

地域文化

第４回国東町総合文化祭

幡　東　亀　昌

第４回国東町総合文化祭は、11月11日（日）から３日間、町文化協会、町教育委員会、町中央公民館３者共催により、町中央公民館全館を開放して開いた。ことしは、懸案となっていた新国東小唄の完成をみたので、その披露や授賞式など記念行事を併せ、新国東小唄完成記念総合文化祭と大きく銘打って、初日を芸能部門、第２日、第３日、２日間を展示部門とした。

芸能は、仕舞、詩吟、尺八、琴、三味線、舞踊、バンド演奏、合唱、演劇各部17団体の代表206名が出演した。このうち演劇「雪解け」は、上国崎地区青年団が新たに取り組んだもので、結婚問題を中心に若い世代と古い世代の思想の相克、親子の愛情の機微を詩情豊かに描いたものであった。これまでの見るものと聞くものから一歩歩を進めて観衆に考えさせるものを加えることができたのは、大きい収穫であったように思う。

２日間にわたって実施した展示部門は、書道、盆栽、手芸、絵画、生花に短文芸の短歌、俳句を加え、７部門総数233点の作品を展示した。

自らが選んだひとつの道を通じ、苦悩に耐え、あるいは楽しみながら、より高く、より深く求め、創造への研鑽を傾けておられる町内有志のみなさんにとって、この文化祭は、年間の活動を集約する場であり、唯一の発表の場であり、さらに前進するために大衆に鑑賞を求め批判を受ける場ともなるものである。観覧者の多寡は、即文化祭の成否、評価につながるものであるとともに、一般住民への理解度を占うバロメーターともなるもの。芸能部門で昨年約600名が、ことしは大ホールのほとんどを埋めつくして約 1,000人、展示部門で昨年約400名がことしは一躍約1,300名の鑑賞者をかぞえることができたのはともかく成功であったといえよう。

反省会のなかで、関係者一同、逐年盛況を極めつゝある総合文化祭の発展を喜び合い、かつこんごのさらなる精進を誓い合うことができたのは、なんといっても感銘深くうれしい限りであった。

（国東町文化協会事務局長）

祭をふりかえって

第9回大分県芸術祭賞決まる

12月5日開催された県芸術祭運営協議会の答申に基づいて、下記のとおり芸術祭賞および感謝状・功労賞を贈呈することを決定。12月18日、県教育庁において贈呈式を挙行した。

記

1. 芸術祭賞

(1) 県民オペラ「吉四六昇天」

開幕行事として大分県の民話「吉四六さん」をオペラ化した創作オペラ「吉四六昇天」の画期的公演によって県下音楽界、県民文化の向上に寄与した業績によって表彰する。

(2) 演劇「沈んだ島の物語」

大分県に伝わる伝説幻の島「爪生島」を主題にして、制作委員会が中心となり、県下の各演劇界より、スタッフ、キャストを構成し、県芸術祭参加行事として至難な公演を実施し、県民文化の向上に寄与するとともに、県下演劇界の発展に貢献した業績によって表彰する。

(3) 日本舞踊「春夏秋冬」

閉幕行事として、流派を越えた団結により創作舞踊「春夏秋冬」を公演し、県民文化の向上に寄与するとともに県下邦舞界の近代化に大きく貢献した業績によって表彰する。

(4) 地域総合

・玖珠町文化振興会議（会長・宿利天祐）

・国東町文化協会（会長・岐部与平）

参加行事として地方の特色を基盤に意欲的で着実な成果をあげて、しかも町民総参加の実をあげており地方文化の向上に寄与した業績によって表彰する。

2. 特別感謝状

(1) 立川　清登

県民オペラ「吉四六昇天」の主役として特別出演し、本県音楽界に多大の業績を残した功績により特別感謝状を贈呈する。

3. 特別功労賞

(1) 大分交響楽団

県民オペラ「吉四六昇天」の管弦楽を担当し、芸術性、創作性の高い演奏を行ない、公演の成功に寄与した功績により功労賞を贈呈する。

4. 感謝状

(1) 県民オペラ　台本制作　阪田　寛夫

〃　作曲担当　清水　脩

〃　声楽指導　横井　輝男

県民オペラ「吉四六昇天」の台本・作曲・声楽の各部門を担当し、公演の成功に寄与した功績により感謝状を贈呈する。

5. 感謝状

芸術祭に参加して諸行事を実施し、地方文化の向上発展に貢献のあった団体・個人に対し感謝状を贈呈する。

第10回県芸術祭主催行事（案）

1. 開幕行事

(1) 期日　10月1日（火）

(2) 場所　大分文化会館

(3) 事業内容　創作バレエ「朝日長者」

2. 閉幕行事

(1) 期日　11月29日（金）

(2) 場所　大分文化会館

(3) 事業内容　大分交響楽団による演奏会

企画画廊

ギャラリートスコ

大分市中央町1－4イセヤビル
TEL　34－6608

第4回九州沖縄芸術祭文学賞最優秀作は
小郷穆子（おごうしずこ）さん（大分県）に決定

九州沖縄各県、福岡市、北九州市共催、文化庁ほか後援、文芸春秋社協賛の昭和48年度九州沖縄芸術祭行事のひとつとして行ないました「第4回九州沖縄芸術祭文学賞」の最優秀作には全地区応募総数154編の中から地区予選を通過した10編を対象に選考が行なわれ、「遠い日の墓標」小郷穆子（おごうしずこ）さんに決定いたしました。大分県からは初の入賞で、2月15日福岡市電気ビル本館で授賞式が行なわれました。

なお同作品は、文芸春秋社刊行の「文学界」3月号に掲載されます。

〔**作者略歴**　大正15年3月25日生れ。日本大学国文科卒。社会福祉法人栄光園乳児院長。「詩と真実」、「東九州文学」同人。短歌誌「街路樹」会員。
現住所＝別府市荘園町5[redacted]

〈お知らせとおねがい〉

▲ 皆様方もすでにご承知のように、紙代等の値上がりにより、芸振会報も予算面から当初の計画どおりの発行が困難な状況となりました。従いまして今回は21、22号の合併号として発行し昭和48年度は一応終了させて頂きます。

昭和49年度も精一杯の努力を致しますので皆様方のご協力を心からおねがい申しあげます。

（K）

▲ 文化講演会の延期について

芸振会議では昭和48年度の事業として3月までに文化講演会を開催するよう企画し、遠藤周作氏を第1候補にあげて交渉を進めておりましたところ、同氏が3月に急遽、外遊することになり年度内の開催が不可能になりました。

事務局と致しましては、役員と協議のうえ、できるだけ早い機会に、適当な講師を決定のうえ、文化講演会を開催できるよう努力をつづけております。

講師、期日等が決定次第、会員各位にはご案内を差し上げますので今しばらくお待ちねがいます。

（K）

▲ 昭和48年度会費の納入について

48年度も残すところ後わずかとなりました。団体会員・個人会員で会費未納の方は、至急納入くださるよう紙上を借りておねがい致します。振替用紙入用の方は文化課文化係（36―1111、内線378）までご連絡頂きましたら早速ご送付申し上げます。

（F）

自 ㈱シンメルピアノ ヤ マ ハピアノ
チェコペトロフピアノ カ ワ イピアノ
モ エクロイツェルピアノ エレクトーン
共済をご利用ください
★ご指定
大分県小中学校生協・大分県高校生協・国鉄・電話局・郵便局・大分県庁・市役所・裁判所・大分県警・旭化成・日鉱佐賀関・大分交通
サトーピアノ
大分・千代町動物バス停前　TEL ㊗4032
中津店・中津市京町2丁目　TEL 0979 ㊗7144